

長澤 祥

CDがアナログLPに聴こえる

音が聴こえない超高音域スピーカーを つなぐと音楽が本物に聴こえる不思議

音が聴こえないスピーカー

開発された理由とは

スピーカーシステムの種には、再生音を出来るだけ類を大別すると4つのタイプに分けられる。

スピーカー一つで構成される「シングル」タイプ。高音用と低音用2つで構成される「ツウエイ」タイプ。高音用・中音用・低音用3つで構成される「スリク」タイプ。高音用・中音用・低音用4つで構成される「フォー」タイプ。

スピーカーの数に関係なく、再生音を出来るだけ広帯域にすること、ひとつのスピーカーのひずみを出来るだけ減らすこと、高音と低音用2つで構成される「ツウエイ」タイプ。高音用・中音用・低音用3つで構成される「スリク」タイプ。高音用・中音用・低音用4つで構成される「フォー」タイプ。

耳に聴こえる音の範囲は30Hzから20kHzということ

オーディオ界の常識となっていた。CDもこの常識で開発された。

アナログレコードとの音質比較でCDが優位に立てないことがレコードファンの中で決定的となり、その理由はCDが高音域を20kHzでカットしているからというところも分かった。

そこでアナログレコード並みの音質を実現するため、スピーカーオーディオCDが開発された。

超高音域をどうやって

スピーカーの音に交ぜる

この特集で

この特集で、スピーカーオーディオCDは100kHzまでを電氣的にCDに交ぜるシステムである。CDでホンを楽器に近く置くのレジャーとアンで、ミュージシャンの演奏の間に伴う動きも分かる。ピアノの音に感やシンバルの叩きかけの強弱感など。

ジャズを聴くと ミュージシャンの気配が見える

この特集で、スピーカーオーディオCDは100kHzまでを電氣的にCDに交ぜるシステムである。CDでホンを楽器に近く置くのレジャーとアンで、ミュージシャンの演奏の間に伴う動きも分かる。ピアノの音に感やシンバルの叩きかけの強弱感など。

この特集で、スピーカーオーディオCDは100kHzまでを電氣的にCDに交ぜるシステムである。CDでホンを楽器に近く置くのレジャーとアンで、ミュージシャンの演奏の間に伴う動きも分かる。ピアノの音に感やシンバルの叩きかけの強弱感など。

この特集で、スピーカーオーディオCDは100kHzまでを電氣的にCDに交ぜるシステムである。CDでホンを楽器に近く置くのレジャーとアンで、ミュージシャンの演奏の間に伴う動きも分かる。ピアノの音に感やシンバルの叩きかけの強弱感など。



Malden Voyage



ところがスピーカーシステムに追加して聴くと不思議なことに音楽は一変する。音の倍音成分が聴きとりにくかったCDの音が艶が加わる。例えば楽器の輪郭が明瞭となる。録音音場の広さも見える。

超高音域を電氣的にCDに交せるのではなく音響的にスピーカーに交せるので、実に自然な結果が得られる。音楽を聴きながら「交せる量」を調整できるところが実用的である。

それに色が素晴らしい。黒やゴールド、シルバーばかりの日本のオーディオ製品の中において、これはコバルト調の優雅な色で工芸品の雰囲気を感じさせている。

フィデリックスのアコースティック・ハーモニータードが発売された当時、チェ・システム。中央がコントロールユニットAH-120K、左右がスーパーツイーターE-120K

クラシックで聴こえる空気感



上からコダイ「無伴奏チェロソナタ」、バッハ「ゴールドベルグ変奏曲」、ベートーヴェン「交響曲4番」

AH-120Kで楽器の静寂感やホールの空気感が聴こえてくる。ヤノシユ・シユタルケルの1948年録音、コダライウ録音の臨場感がこれほどリアルに聴こえるのも

り、改めて演奏のスケールの大きさを体感できる。そしてオーケストラ録音といえはカルロス・クライバー指揮のベートーヴェン「交響曲4番」を挙げたい。ホールの聴衆も息を止めて見守る。僅か数秒だがホールの

マイクrohンは静止した空気さえも敏感に察知するのでこの間は無音である。こんなスリリングなライヴ感をAH-120Kで聴くことが出来る。

製品についての詳しい情報はwww.fidelix.jpを

ドが発売された当時、チェロの弦から松脂がとろろ音が聴こえるとオーディオファンで評判になった。CDで復刻されたが目の前でチエロが鳴る。

若いシユタルケルが静寂のなかに弦を弾く姿が現れる。時代を超えて今なお新鮮な音に驚くばかりだ。

グレン・グールドが弾くバッハの「ゴールドベルグ変奏曲」。オーディオ装置が良くなるほどグールドの姿が近くに見える名演

奏・名録音。グールドの声が生ナマリ。これもAH-120Kで再現される。ピアノの音も骨格豊かに鳴

ジャズ・ファン3人で聴いたスーパーツイーターの音

雑誌「ジャズ批評」7月号でジャズオーディオについて座談会を行った。

TさんとHさんが私の部屋にやって来た。オンキョーのスピーカーシステムG-1120Kが追

加セットされている。3人が日頃熱心に聴いている最高録音のジャズCD決定盤を聴こうというのだ。

AH-120Kがつかない。航イ・ウィット女・ク・ウィット処デヨト・イ「サ・ニ・コ・ア」

内緒にしてあった。それが自慢のCDを鳴らす。ジャズに必要な重低音を再生するサブウーハーの効果から話が始まった。超高音域を再生するスーパーツイーターに話題が進み、AH-120Kが密かにつない

であったことを白状した。音が出ていないので誰も気がつかない。そこでAH-120Kのオン・オフ実験がスタートした。

「ボクもスーパーツイーターをいろいろ買っては放り投げて今はつけていないですが、ここで聴いてつけようと思った。普通はシンバルの音の伸びだけに作用させようと思

ですが。でも実際にやってみるとそうではなく、中音域から低音域まで全帯域に作用するわけですね。特にベースの音のあたりぼさというのが官能的になりますよね。ちょっとした薄化粧したような、いい感じになりますね。不思議ですね。スーパーツイーター

とはいももの音の全帯域に作用する装飾マシみたい

はなかったと電話があった。一方のHさんはさっそく注文したらしい。



「サ・ニ・コ・ア」